

つながる  ひろがる

Link

パートナーズクラブ

2018年
1月
第23号

Link
パートナーズクラブ



 西日本新聞社

2018年1月 第23号

パートナーズクラブ事務局

〒810-8721 福岡市中央区天神1-4-1 西日本新聞社 西日本会事務局内
TEL092(711)5190 FAX092(711)5199

 西日本新聞社

西日本新聞・西日本スポーツのご購読申し込みは  **0120-44-0120**

西日本会2018新年祝賀会

4団体の会員が交流深める



「西日本会2018新年祝賀会」が1月10日、福岡市博多区のグラントハイアット福岡で開かれました。西日本会に所属する西日本支店長会、パートナーズクラブ、政経懇話会、地域フォーラム（長崎・佐世保・玄海）などから約250人が参加。

新年祝賀会の恒例となっているのがエプロンの着用です。会場受付で、支店長会はオレンジ、パートナーズクラブはグリーン、西日本政経懇話会と地域フォーラムは黄色、西日本新聞社とそのグループ会社は白のエプロンを身に付けます。それぞれのエプロンには、胸のところに会社名と氏名を書いた紙を貼り付けているので、初対面でも気軽に言葉が交わると好評です。

開会あいさつは、西日本会を代表して西日本政経懇話会会長の松尾新吾氏（九州電力相談役）。西日本会に所属する団体について簡単に紹介した後、「西日本会という仲間意識を持って、交流を持ちながら、それぞれに仕事のために尽くしましょう」と語りました。

続いて西日本新聞社代表取締役社長の柴田建哉氏が新聞社代表として「報道機関なので報道を

通じてというのがありますが、どいうやうて地域に必要とされる企業であるかというのが最大のテーマです」とあいさつ。そして、20社あるグループ会社で、今年初めて新年祝賀会に参加している「糸島新聞社」と豆腐を中心とした食品の移動販売を行っている「豆吉郎」の社長を紹介しました。

乾杯の音頭は、西日本支店長会会長の上谷隆氏（タカラスターダート常務執行役員福岡支社長）。「今年は成年、形を結果にするのが成年です」と述べた後、声高らかに「乾杯」の発声をしました。

歓談に入り、名刺の交換や新年のあいさつなどで会場は賑わいました。

お開きは、恒例の博多祝い唄（祝いめでたと博多手一本。博多祝い唄の一番をパートナーズクラブ会長の芦塚日出美氏、博多座取締役相談役、二番は西日本支店長会副会長の河野健吾氏、鹿島建設常務執行役員九州支店長、三番を西日本新聞社取締役総務局長の大久保昭彦氏。壇上からの歌声に合わせて、参加者も一緒に歌いました。そして博多手一本を芦塚日出美氏が入れ、新年祝賀会の締めとなりました。



表紙の写真

「早春の風物詩」
撮影：高鷹 るみ子（福岡市在住）

つながる ひろがる
Link
2018年
1月
第23号

パートナーズクラブ

C O N T E N T S

西日本会2018新年祝賀会 2

例会Report
「一から分かる資産づくり」
久留米大学商学部教授 塚崎 公義氏 3~7

合同例会 懇親会 8



久留米大学商学部教授
つかさき きみよし
塚崎 公義氏

一から分かる 資産づくり

創刊140周年の西日本新聞は、2017年11月に資産形成を応援するマネー情報紙を創刊。読みやすさを追求し、初歩から始められる内容と注目されています。
西日本支店長会やパートナーズクラブなどが加盟団体の西日本会では第7回合同例会として、西日本新聞創刊140周年・マネー情報紙「Oh!Yen!(オーエン)」創刊記念 塚崎公義特別講演会「一から分かる資産づくり」を開催しました。資産づくりで大切なことは「働いて稼いで貯める」「株と米ドルでインフレに対処」「とにかく10万円分の投信を買う」といった内容で、塚崎氏が資産づくりのポイントについて分かりやすく語りました。
(講演日:2017年12月4日)

最大の目的は老後資金

資産づくりの目的は、結婚資金やマイホームなどがいろいろありますが、一番大事なのは老後の資金。老後の生活費を考える上で、どうやって運用して増やそうかと考える人も多いでしょう。しかし、運用して増やすにはリスクがあり、上手いけばリッチな老後ですが、運用に失敗してみじめな老後を送るのはいやですね。私は「Oh!Yen!」の第1回コラムで儲けようと思つてわくわくするよりも、損しないようにハラハラしないで済むようなことを考えましょうというスタンスで書きました。

老後資金には、どんなリスクがあるのでしょうか。世の中には心配性の人がいて、老後の蓄えを泥棒に盗まれたり、家が火事で焼けたり、自分が働けなくなつて給料を貰えなくなつたらと考える人もいます。そこまで心配すると、隕石が落ちてきたらどうしようと考えたのと大して変わりません。現実的なリスクは、長生きとインフレです。長生きしている間にインフレが来るのが、一番可能性としては高いのです。長生きがいいのは一般論で、老後

資金だけを考えると長生きは大きなリスクなのです。どんなにお金を持っていても、100歳まで生きていたら、お金を取り崩して足りなくなつてしまうことが考えられます。80歳、90歳でも、老後の資金が足りなくなるのが一番怖いリスクなのです。

もう一つはインフレ。過去30年インフレになつていないので忘れかもしれませんが、30年前の日本はインフレでした。長生きしたら、インフレになる可能性はけっこうあります。長生きしているだけでもお金が底を着くのに、長生きしている間にインフレが来て、毎月下ろす貯金の額が増えていったらどうしようということになるかもしれません。

年金を70歳から受給する

今日の演題は資産づくり。資産づくりと聞くと、どうやって運用で儲けようか、運用で増やそうと考える人が多いのですが、運用で増やそうとするよりリスクを取ることになりません。

働いてお金を稼ぐのにリスクは要りません。元気なうちは働きましょう。定年になつても別の仕事を探すことができます。日本は少子

高齢化で、労働力不足の時代になっています。高齢者でも仕事を探せばけっこう見つかりますから、定年後も働きましょう。

サラリーマンの専業主婦では、103万円の壁、130万円の壁という言葉がクローズアップされています。税金や年金の関係で、103万円や130万円を超えないように働こうという主婦の方が多いのですが、私は「夫の税金が多少高くなるうとも、自身の年金が天引きされようとも、200万円稼げばいい」と申し上げています。

それから生活の見直し。生活を見直すというと、すぐビールを発泡酒に替えて節約しようと考える人も多いと思うのですが、大きな出費だけコストパフォーマンスがあまりよくないものがあるはずですよ。見直す際に、「お前、この出費はなんだ。これ削れるだろう」「あなたこそ何よ」と、喧嘩になつたのでは意味がありません。夫婦で話し合つて、「これはコストパフォーマンス悪いから、やめてもいいかしらね」というようなものが、一つや二つはあるはずですよ。

働いてずつとお金を得ていけば、老後の心配はありません。途中でインフレになつても、インフレになれば給料は上がります。

老後の生活費は夫婦で「1億円かかる」と言われています。貯金は大事ですが、なかなか1億円を持っている人はいません。老後資金の一番の基本は公的年金。これは、長生きとインフレにとつても強いという素晴らしい性格があります。

標準的なサラリーマンと専業主婦の場合で、年金は月22万円程度です。まったく生活できない金額ではありません。大事なことは、どんなに長生きしても貰えるということ。100歳や120歳まで生きても、毎月22万円は国から年金を支給されるわけですから、最低限の生活はできるという安心感があります。

それからもう一ついいのは、インフレになつたとき、その分だけ支給される年金の金額が増えること。もし将来、石油ショックみたいなものが来てインフレで物価が2倍になると、年金は2倍の44万円になります。若い人が払つた年金保険料を、高齢者へ年金として払つていきます。インフレになつて物価が2倍になつたら、若い人の給料は2倍になります。若い人から貰う年金保険料を2倍にして、高齢者に払う年金も2倍にするのです。若い人が高齢者を支えるという制度は、とつてもインフレに強い制度です。

若い人の数が少子化で減り、高齢化で高齢者の数が増えてくると、若い人と高齢者の比率が変わつてきますので、高齢者が1人当たり受け取れる年金の額が減つてきます。ある程度減つてくるのは覚悟しましょう。「今の若者は老後になつたら年金を貰えない」と言っている人は大勢いますが、貰えないことではないのです。人口の比率が変わつてくる分だけ目減りしていくのであつて、そんなに悲観しなくてもいいのです。年金は圧倒的に頼りにする存在なのです。

ぜひ知つていただきたいのは、年金は65歳から支給されますが、70歳から受給すると年金の額が42%増えること。夫婦2人で22万円、これが42%増えたら30万円以上になります。ただし、70歳までどうやって食いつなぐか。理想は70歳まで働いて生活費を稼ぐ。そうでなかったら65歳まで働いて、そこから先の5年間は、退職金や蓄えを少しずつ切り崩して食いつなぎましょう。

どのくらい必要かという点、毎月25万円、5年間で1500万円。65歳から70歳まで貯金を1500万円取り崩して我慢すれば老後の安心が増します。実際に70歳まで待っている人はほとんどいないそうですが、これはお得な制度です。

こういう話をすると、「70歳前に死んだらどうする」と反対される方がいます。これに関しては「年金とは保険です」と申し上げています。火災保険と一緒に。自宅が焼けたときに保険会社が保険金を払つてくれるので安心です。「火事にならなかつたら保険料がもつたいない。だから俺は火災保険に入らない」と言う人はあまりいません。それと同じと思つてください。長生きしたときに安心だし、早死にしたときに損をしない、そんな虫のいい話はありません。火災保険料を払わないのに火事になつたら保険が下りるなんて、そんなことがないのと一緒です。ぜひ70歳まで待つことをご検討ください。

過去30年もインフレが来ていないので、インフレは本当に来るのかと思つている方は多いでしょう。私はインフレが来ると考えています。一つには、景気が良くなり始めてからインフレになるまでけっこう時間がかかるということ。景気が悪いときは失業者がいつぱいいますから、景気が良くなつて企業が生産を増やすために人を増やしますが、失業者がいるから安い給料やアルバイト代で雇えます。でも景気が良くなつてくると、失業者が減り人手不足になるからアルバイトの時

給を上げることになります。人が集まらないという時代が来るまで、けつこう時間がかかりますが、今はその時代に入っているのです。日銀総裁が2%のインフレ率を目標と言っています。実際にそれが実現すると10年で物価が2割上がるようになります。おそらくその間、銀行預金の金利はゼロでしょうから、銀行預金の金額が2割減ったのと同じ痛みをこうむるわけです。

インフレ対処は株と米ドル

それに対処するには、インフレに強い資産と言われている株と米ドルを持つことです。インフレが来たら、当然株の値段も上がります。物価が2倍になったら株価が2倍になるかというところまで、そこまでそんなにびったりではないので、インフレがくればおそろく株価も上がります。

次は米ドルについて。万が一、大地震が来た場合には、日本の物価が何倍かに上がります。そうなる、当然アメリカから例えば木材を買って、家を建て直したり、工場を建て直したりします。そうするとドルへの需要が出てきて、ドルの値段が上がります。日本の材木の

値段とアメリカの材木の値段が同じになるまで、材木を輸入する人がドルを買います。そうすると日本の材木の値段が5倍になったら、ドルの値段が5倍になるまで上がっていくことになりません。

ドルや株は、インフレに強い資産なのです。だからといって、銀行の貯金を全部下ろしてドルを買おうとしたら、ドルが値下がりしたときに困りますし、銀行の貯金を全部下ろして株を買おうと、株が暴落したときに困ります。いろんなものをちよつとずつ持つのが基本的な姿勢なのです。

ドルも株もちよつと持つて、残り銀行預金。インフレが来たら、銀行預金の部分は痛みを受けますが、ドルと株を持つていて良かったねということになります。株が暴落しても、株が暴落した部分は仕方ないけど、現金は減っていないし、ドルも値下がりしていない、ということで最悪の事態は避けられます。

時間分散も大事です。今日の話聞いて、明日株とドルを買いに行ったら、明後日に株とドルが暴落するかもしれない。それを避けるためには、時間をかけてちよつとずつ買うことです。高いときも少し買、安いときも少し買、とても儲けたということもなければ、とて

税です。昔からあるのが財形貯蓄という制度です。今は銀行に貯蓄してもほとんど利子が付かないので、財形貯蓄をしている人は少ないでしょうが、財形貯蓄にもいいところがあります。

お金を貯めたいけど、どうやって貯まるのよとよく聞かれます。ダイエツトしたいけど、どうやって貯まるのよと聞かれます。ダイエツトは食べる量を減らして、運動をすればいいと分かっています。成功している人は少ない。人間は意思が弱いのです。意思が弱い人が少ないのではなく、ほとんど人は意思が弱いのです。そうでなかったら、



イエツト産業が栄えるはずがありません。小学生のときに、夏休みの最後の日になくなく宿題をした人は多いでしょう。そういう人は、お金がたまらないのは当たり前です。iDeCoは60歳まで下ろせません。意思が弱くて途中で自動車などを買ってしまう人はiDeCoにたくさん預けておきましょう。

財形貯蓄の金利はほとんどゼロなので非課税のメリットはあります。一つは給料天引き。給料袋に詰める前に、人事部が貯金してくるので、意思が弱い人でもお金の貯まるのです。もう一つは、銀行の預金を下ろすのはATMで暗証番号を入力すればいいので簡単ですが、財形貯蓄を下ろすには、申し出が必要なんです。だから簡単に下ろせないのです。

若い人は、借金して家を買うことも一つの方法です。住宅ローンがあるから、お金が足りないなどとなまっちゃう悪いことは言えません。家を買おうと、もう一ついいことがインフレに強いということ。借家は、住んでいる間は家賃を払うことになり、家賃はインフレになると上がります。悲惨な老後にならないためには、家を早く買ったほうがいいと私は考えています。当



も大損することはありません。

退職金というのは、会社に預けている定期預金です。現役の時代、退職金を貰うまでの間は、むしろ銀行の預金はほとんどなくても全財産を株とドルにしても構わないのです。会社に退職金というものがあると考えると、銀行預金のほとんどをドルと株に替えてもいいと思います。

退職金を貰ったときに大量の株とドルを買おうと、時間分散ができなくなり、今のうちから少しずつ株とドルを買い、退職金を貰ったときに自分の全財産の割合がちょうど良くなるようにしていく

然ですが、住宅ローンは固定金利で借りましょう。変動金利で借りて、インフレが来たら住宅ローンの金利が上がったら困ります。

サラリーマンの老後資金の目安は65歳で2000万円。5年間、これを取り崩して毎月25万円で生活して1500万円かかります。何もなければ70歳の時点で500万円が手元に残ります。70歳まで待ってから年金を受け取ると、毎月の受取額が22万円の1.42倍の年金です。その500万円にはおそろく死ぬまで手をつけなくても大丈夫でしょう。

65歳で年金を貰う人は、毎月3万円から5万円ぐらいい取り崩していくと、だいたい平均寿命よりもちよつと長く生きて、貯金が無くなる感じがします。

初心者はず投資信託

これからは資産運用の話です。株はインフレに強いから持ちましょうと申し上げました。株式投資は大きく分けて二通りに分かれ、短期売買の投資と、買った30年持つような投資です。法律的にはどちらも同じですが、性格は全く違います。ラスベガスのルーレットで老後の

株とドルを持つことを、日本政府も応援しています。貯蓄から投資へ」という言葉は聞かれたことがあると思います。政府は、アメリカに、株を買って、投資をするから経済に活力があると見ています。それで、株を買った人には税金を安くする制度を作りました。NISAと個人型確定拠出年金(iDeCo)です。

株の売却益や配当は、2割は税金で持っていかれるのですが、その税金を払わなくてもいいのがNISAです。NISAの枠が使えるうちは、普通に株を買おうよりもNISAの枠で株を買った方が絶対で得です。iDeCoも同様に、売却益や配当に税金がかかりません。iDeCoがもつと良いのは、所得控除になるからです。普通に株を買ったときには、給料の中から所得税を引かれた残りの中から株を買います。iDeCoは所得控除ですから、給料の中からまず株を買って、残った金額に所得税の税率をかけて所得税の金額を計算します。給料が高い40代や50代のサラリーマンの方は、所得控除があるのでぜひ使ってほしいですね。しかも配当は非課

資金を掛ける人はいません。あくまでもお小遣いの範囲内で遊ぶのもです。株の短期売買も同じと考えてください。買った30年持っているというのは、会社が生み出す価値の分け前に預かることです。株価が上がるかどうかは分かりませんが、30年間ずっと配当を貰い続けていけばそれなりの額になります。そういうスタンスの投資をしましょうということです。

初心者は日経平均株価と同じような動きをする投資信託、あるいはアメリカの平均株価と似たような動きをする投資信託を買うことをお勧めします。銀行でも証券会社でも売っています。特に気を付けてほしいのは、初心者ほど株価が上がってくると、今買わなくてはと焦ります。株価が下がってくると売ることになります。結局、一番高いときに買い、一番安いときに売ります。毎月1万円買うと決めたら、毎月1万円買う。ポーンと10万円買うと決めたら、ポーンと10万円買う。自分でルールを決めたら守ることです。

それでも株に手を出したくない人はけつこういます。そういう人は、日経平均に連動する投資信託を10万円だけ購入しましょう」と



第2部は交流懇親会

— 政経懇話会の松尾会長があいさつ —

第1部となる塚崎公義特別講演会「から分かる資産づくり」が終了後、第2部として交流懇親会が催されました。

最初に司会者が、西日本会の構成団体である西日本政経懇話会、西日本支店長会、パートナーズクラブ、地域フォーラム（長崎・佐世保・玄海）の概要を紹介しました。

あいさつと乾杯の発声は、西日本会を代表して、西日本政経懇話会会長の松尾新吾氏（九州電力相談役）。「若いときに九電の年度経営方針のたたき台を作ることになりました。過去のファイルを見ていると四つしかないことが分かったのです。一つが供給の安定、二つ目がコストの低減、三つ目が明るい職場づくり、最後が地域との連帯です。地域の発展なくして九電の発展がないと思うようになりました。企業メセナです。西日本新聞も地域とともに掲げています。いろんな企業の人たちが集まっている西日本会は、個人的にも親しくなれる会です」と話してから、乾杯の発声をしました。

参加者は、それぞれに会話を弾ませて交流を深めていました。

交流懇親会の中締めあいさつは、西日本新聞社取締役会長の川崎隆生氏。第1部の特別講演の内容に合わせて、「地元の経済を知るためには株を持たなければならぬ」ということで、社長になったときに初めて株を買いました。地元七社の株です。経済を見る、新聞を読む動機として、株や投資信託を買っていただきたい」と締めくくりました。



新入社員には「初めてのボーナスで投資信託を買いなさい。10万円損しても別にどうしたっていい」とはしないでしよう」と言います。なぜ買うのかというと、人間って不思議なもので10万円でも投資信託を持つっていると経済記事を読みたくなるものです。新入社員のときに10万円の投資信託を買って、定年まで毎日株価を見ることになり、毎日見ていると、株の動きが少し分かるようになります。そうすると退職金デビューをしなくていいのです。

私自身経験したことがあります。「人間は合理的に行動しない」という経済学が今年ノーベル賞を取りました。アメリカに留学しているときに、アメリカの景気が良いのか悪いのか知らないうちに、5万円だけ株を買ったのです。途端に毎日、英語の経済新聞を読むようになりました。英語も少しうまくなりました。アメリカの経済にも詳しくなりました。でも落ちがあり、アメリカの経済新聞はけっこう高く、新聞代が5万円くらいかかったのです。でも、その5万円には替えられない、英語とアメリカ経済の知識が身に付きました。若い人には真似をしてほしいと思っています。

社員にはぜひ金融教育を

会社での金融教育についてお話しします。金融教育は福利厚生です。社員にボーナス1万円余分に払ったら喜ぶかもしれないけど、でも社員に投資優遇税制の事を教えて社員が払う税金が5万円減つたら、その方がずっと社員のためになります。しかも、御社の腹も痛みません。

それから、若いうちから投資をする習慣を身に付けさせましょう。そうでないと、彼らが退職したときに、退職金デビューして大損したらかわいそうです。具体的には社員向けの研修です。新入社員研修の1時間か2時間を使ってお金の話をしましょう。新入社員が初月給を貰ったら1万円でもいいから投資信託を買って、ボーナスを貰ったら10万円買ってください。その5分が社員にとって、けっこう大きなメリットになります。

結婚している社員には、夫婦での金融教育セミナーを開催しましょう。老後のお金の話は、絶対夫婦に聞かせることです。ただし、お金の話を夫婦で話し合うと喧嘩になる可能性があります。セミナー

のときには、ぜひ夫婦円満にやってくださいということを強調してください。

私が前にいた銀行では、50歳ぐらいのときに全員集めての「たそがれ研修」がありました。年金の額とか、住宅ローンが幾ら残っていると、こういう目に遭うとかの研修で、社員の評判は良かったようです。こんなような研修も検討されてはいかがでしょうか。

研修をやって、「NISAという素晴らしいものがあるよ。iDeCOという素晴らしいものがあるよ」と話しても、「今忙しいから来月暇になったら」と考える社員は多いと思います。素晴らしいものがあるって、頭で分かっているもなかなかやらない、さっきのダイエツトと同じで、頭で分かっているも面倒くさいからやらない。これは会社が背中を押してやらなければならない。例えばNISAの口座を作ったら会社が1万円支払う、iDeCOの口座を作ったら会社が1万円支払う。そうしたら口座を作らなう。口座を作れば、あとは自動引き落としで貯めていけばいいのですから。NISAの口座を開いたら1万円貰えるなら作ろうという社員は絶対多いと思います。これは、ボーナスを1万円増やすよりも、絶

対社員の役に立つと思いますので、ぜひ検討してみてください。

社員の福利厚生という話、持株会を作ろうという話も出ます。未上場の会社であれば、とつてもいいと思います。愛社精神も養えるし、将来上場したときにもすこい利益を社員に還元できます。しかし、上場会社の持株会はいかがなものかなと思っています。上場会社が持株会を作っても、この会社の社員で良かったと思わないでしょう。社員にとっては、持株会は実は迷惑な存在で、万が一御社が潰れたときに社員は失業し、給料をもらえませんが、さらに持株会の株券が紙くずになります。過去、実際に上場会社であった出来事です。そういうリスクがあることを覚えておいてください。

久留米大学商学部教授
塚崎 公義

東京都出身。1981年、東京大学法学部卒業。日本興業銀行（現・みずほ銀行）入行後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）でMBAを取得。同行調査部、財団法人国際金融情報センター調査企画部長などを経て、2005年から久留米大学へ。「退職金貧乏一定年後のお金の話」（祥伝社）、「老後破産しないためのお金の教科書」（東洋経済新報社）、「経済暴論」（河出書房新社）など著書多数。趣味はブログなど文章を書くこと。